

こころの言の葉

～第19集 あなたと過ごせる この瞬間を大切にしたい～



令和3年度「こころの言の葉」コンクール作品集

鹿児島市教育委員会 編

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 杉元 羊一

本年度の「こころの言の葉」作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまでに、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております、今回で十九回目を迎えました。

本事業には、面と向かっては恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生とその保護者の心の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は一万六千八百七十一点。その内、保護者の部の応募も二千点を越えました。「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である保護者と子供の心の交流が図られていることをうかがうことができました。さらに、昨年八月にはエフエム鹿児島の生放送番組「あさCAFÉ」で令和二年度の入賞作品が朗読され、今年度もより多くの市民の皆様にご覧される機会に恵まれたことを大変うれしく感じています。

この作品集には、中学生とその保護者が、お互いに向けて宛てた四十四編のメッセージが掲載されています。感謝の気持ちを素直に伝える言葉。不安やささやかな願いをそっとつぶやく言葉。自分の反抗期を受け止めながら気持ちを打ち明ける言葉。我が子の成長した姿に一喜一憂しながら大きな心で受け止める言葉。いつの時代にも胸を打つこれらの言葉に加え、新型コロナウイルス感染症の影響により、これまで当たり前前に感じていた家族との交流や日常の活動が思うようにできなかつた子供への応援の気持ちを込めた作品も多数みられました。一つ一つの言の葉が、読む者の心を揺さぶります。御家族皆様でこの作品集に触れ、保護者や子供としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様にご心から感謝申し上げます。

令和四年一月

目次

「思いを伝える」言の葉

―子から親へ―

もうそろそろ 4

宝物 5

あの日のうれしさ 6

和英辞典 7

お手紙付きのお弁当 8

来年こそは 9

道 10

ほどほどに 11

一枚のメモのぬくもり 12

父の背中 13

「思いをつなげる」言の葉

―親から子へ―

ゼッケンつけ 15

娘への贈り物 16

笑顔のあなたにありがとう 17

半分こ 18

今、あなたに伝えたいこと 19

良い子ですね 20

伝わってる 21

絵本 22

伝えておきたいこと 23

「上を向いて歩く君へ」 24

「思いを交える」言の葉

―子から親へ―

あの頃の 26

単身赴任の父ちゃんへ 26

電話越しの父の声 27

誕生日 27

母の声 28

父の魔法の言葉 28

反抗期 29

秘密のライン 29

共鳴よりももつと 30

父の涙 30

私の日常 31

大丈夫 31

「思いを重ねる」言の葉

―親から子へ―

こころの言の葉 33

友達 33

宝物のメッセージカード 34

作戦会議 34

「ぼく、じーとしてた」 35

実は 35

証 36

心を読む能力 36

変身ベルト 37

口ずさむ 37

兄妹ゲンカ 38

将来の夢 38

令和三年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧 39

令和三年度「こころの言の葉」コンクール表彰式 40

審査委員講評 41

編集後記 43

「**思いを伝える**」**言の葉**

—**子から親へ**—



もうそろそろ

私の家は、決まった場所にお菓子が置いてある。食べて無くなるとそこには、また数日後、同じお菓子が置いてある。それが何週間も続くことがある。

私と妹のどちらもが好きなお菓子を父が母にそつとりサーチし、父が買ってくるのだ。それにもかかわらず父は、

「お父さんが食べようと思っ**て**買ってくるお菓子がいつも無くなっているんだけど。」
と、私たちに訴うったえてくる。でもそれが、少しうれしそうに見えるのは私だけだろうか。父なりの私たちに対する愛情表現なのかもしれない。

でも、お父さん、もうそろそろ別のお菓子を食たべたいんだけどな。

宝物 たからもの

私は、何か悩みや不安なことがあると母に抱きつく。母の体温は温かく心地よい。心音を聞くと落ちつく。小さい頃から私はよく抱かれながら

「宝物ちゃん。」

と母に呼ばれていた。それは、母にとっての大切な宝物だからだそうだ。文字どおり、私は宝物のように育てられてきた。身につけるものから食べるものまで、すべてに気を遣ってくれた。母は、

「あたりまえ。」

と言うが、すごく大変だったと思う。

けんかをしたり、言い争ったりするけれど私も同じ。母は私の宝物。



あの日のうれしさ

いつも夜おそくに帰ってくる父。毎日十二時、おそい時で一時に帰宅きたくすることもあるから、休日ぐらいしか会話がない。ある六年生の授業参観の日、いつも母が来るから今日もまた母が来るのだらうなと思っていた。授業が始まり、ふと、ろう下を見ると、こちらを見ている父の姿すがたがあった。とてもおどろいておもわず目をそらしてしまった。家に帰り母に聞くと、わざと父を行かせたと言った。父が私のために来てくれた、あの日が一番うれしかった。時間が合わない日もあるかもしれない。でも、あの時はとてもうれしかったから、また来てほしい。お父さん。



和英辞典

塾じゅくで和英辞典が必要だったため、家にあつた少し古いものを持って行つた。中を開けると、何枚まいか古いメモが出てきた。つたない英語で書かれたそのメモの字は、母の字だった。辞書のページにも、ところどころ見慣れた母の字で書き込まれている箇所かしょがあり、昔の母と一緒に勉強いっしょしているような不思議な気持ちになつた。半年後に高校受験こうくを控ひかえている私を

「一緒に頑張がんばろう。」

と応援おうえんしてくれているのかもしれない。だったら私はこう答えよう。

「お母さん、応援おうえんありがとう。一緒に頑張がんばろう。」



お手紙付きのお弁当

土曜授業の日は、誰だれよりも早く起きてお弁当を作ってくれてるよね。私は、土曜授業の日がいつも待ちどおしい。

今まで、気付いていたのにたった「ありがとう」の一言がはずかしくて言えなかった。けれど、私がこんなにも部活を頑張がんばれているのは、お母さんのお手紙のおかげです。母もきつとはずかしくて、お手紙はお弁当のうらにはりついている。

「あなたなら出来る。」この短い一文は、手紙にいつも書いてある。短いけれど、母の精一杯の気持ちがつまった一文だと感じる。

そして、いつかは私の精一杯せいいつぱいの気持ちを込めて『ありがとう』って伝えたい。最後に、お手紙は一枚まいも欠かさず持っているよ。そう言えるまでそばで待っていてください。

来年こそは……

私の大好きなお父さん。もう、五年も会えていないね。体は大丈夫だいじょうぶ？お仕事は順調かな？

中学生になってから、お父さんと話す機会が減ったね。中学二年生からは、塾じゅくにも通いだして、本当に話せなくなったね。つい先日、友達と歩いていたとき、ふとお父さんのことを考えてみた。そしたら、お父さんの声が思い出せなかった。その日の夜は、お風呂ふろで泣いちゃったよ。

いつも家族を大事にしてくれているお父さん。体は、私よりも病弱で、いつも大変なお父さん。そばにいてあげられなくてごめんね。来年こそは会おうね。いっぱいお話ししようね。一緒に旅行いっしょしよう。一緒に住もう。だから、それまではこのパンデミックを乗り切ろう！「お父さん、いつもありがとう。大好きだよ。絶対、会おうね！」

道

いつも私は母と学校までの道を歩いてきている。理由は母の仕事場にとっても近い場所に学校があるのと、家を出る時間が同じだからだ。すごく楽しい気分で家を母と出る日もあれば、一切口を聞かずに家を出る日もある。それでも母は、いやな顔をせず、一緒に歩いてくれる。三年間一緒に学校まで歩いてくれてありがとう。来年私は高校生になり、きっと母と歩いて学校に行くことはないと思う。だから母と歩いたこの道は中学生のときの思い出になると思う。



ほどほどに

私が学校に行くとき、

「行ってきます、頑張がんばってくるね。」

と言うと、母は、

「頑張らないで、ほどほどに。」

と言う。

私は無理して頑張りすぎることもある。だから、母は心配して「ほどほどに。」と
してくれる。私はこの言葉で救われる。そして、学校に行きたくない日も頑張れる。だから
私はこの言葉が好き。

今日も、ほどほどに行ってきます。



一枚のメモのぬくもり

私は、携帯を持っていない。今年の夏休みは、三泊四日の研修に行く計画があった。連絡がとれないことを寂しく思い、携帯が欲しいと思い切って伝えてみた。急でもあったし、買う予定もなかった。今回の願いは叶わなかった。研修が始まって二日目の夜、両親が洗濯物を引き取りに来てくれることが分かっていたので、私は、一枚のメモに楽しく過ごしていることや体調が良いことを書いた。きっと私の体調を心配していると思ったからだ。両親とは会えなかったが、新しい着替えの中に一枚のメモが入っていた。母の字だった。「体調はどう？明日は三日目。登山楽しんでね。お母さんはワクチンをしたよ。変わらず元気です。」などとつぶられていた。母が書いた文字からは母のぬくもりが伝わってきて、胸がいっぱいになった。

父の背中せなか

私の父は消防士。一日中家にいたり、いなかったりをくり返す。隊長になり、「おめでとう。」といっても「ああ。」と一言だけ。父は、一緒に歩いて一人先にいってしまった。私は父の背中を追いかける。冷たすぎると思うこともあるけれど、私は知っている。暑い部屋で勉強していること、父の部屋には分厚い書類がたくさんあって父の字が書かれたメモがたくさん貼りつけてあること。

父は昔から負けずぎらいで何事も一生懸命な人だった。カッコイイ父の裏にはきつとたくさんの努力があるのだろう。私は父を尊敬している。いつか追いつけるかな。父のたくましい背中をずっと追いかけるよ。



「思いをつなげる」
言の葉

— 親から子へ —



ゼッケンつけ

「これ明日までに縫ぬっておいてくれる？」

「もっと早く言っといてよ！」

毎年同じやりとり。

「面倒めんどうだなあ。」

心の中でつぶやく。

中三の新学期。

ああ、これが最後のゼッケンつけかあ。

針はりを持つ手に力が入る。

いつもより細かい縫い目で仕上がっていることにあなたは気付くかな。



娘への贈り物

「大きくなったら、いつか私にちょうだいね。」

三十年間書きためた手書きのレシピノートを見て、十三歳のあなたは、突然私に言いました。

あなたが私の味を引き継ぎたいと思ってくれたことが、何よりも嬉しかった私。

いつの日か、このレシピノートを渡す時がきたら、あなたへの愛情や優しさも一緒に添えて渡したい…。

そう心に決めていきます。



笑顔のあなたにありがとう

「さあ、もう寝る準備をしようか。」

笑顔で優しくおばあちゃんの手を引いて寝室に案内してくれるあなた。

この言動に、私は何度助けられたことでしょうか。

介護者なしでは生活できない母との同居生活が始まり一年半。介護には休みがなく、まとまった睡眠もとりづらい日々。疲れが溜まっている私に気付くと、さりげなく声かけをして手伝ってくれるあなた。

そのおかげで、私は母の在宅介護を続けることができています。そして、笑顔で優しく声かけをするあなたを見ると、私には母への接し方で反省する部分があることに気付かされます。

あなたがいつの間にか、私を支えてくれる存在にまで成長していることに、驚きと嬉しさを覚えています。

いつも本当にありがとう。

半分こ

「はい、お母さんの分。」

と言って差し出してくれたのは、コンビニのチキンの食べかけ。貴方は小さい頃から必ず半分くれる。誰が教えたわけでもなく、一人っ子だから誰に欲しがられるわけでもないのに。自分の大好きなお菓子もハンバーガーもアイスクリームも。

母は食べ盛りの貴方ほどお腹も空かないし、甘いものも沢山食べられないんだよ。でも、貴方の、「はい、お母さんの分。」って言葉が嬉しくて、いつも喜んで受け取ってしまう。いつまでも貴方が母の事を気に掛けてくれるか分からないけど、貴方が半分差し出してくれるうちは有り難く頂くね。優しい心に育ってくれてありがとう。



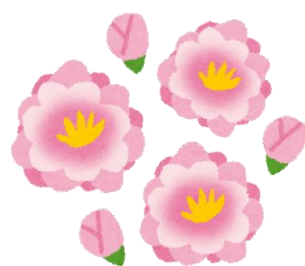
今、あなたに伝えたいこと

なんにでも積極的に活発な子が光を浴びる時代…。

心こころ優しく控ひかえめな子は目立たない世の中ですが…。

お母さんはそれがすべてじゃないと思う…。

声を大にして言いますよ。



いくら積極的でも人の気持ちや痛みの分からない子より控えめで優しい心をもつあなたの方が何百倍も素敵すてきです！

これからも自信をもって成長してくださいね。

良い子ですね

覚えていますか。あれは、あなたがまだ三歳さいの時でした。その頃ころのあなたはやんちゃで、母おこに怒られてばかりいましたね。そんなある日のお昼寝ひるねタイム。あなたは、うとうとしている私の手を掴つかみ、その手で自分の頭を撫なでながら、「○○ちゃんは、良い子ですね。」と言ったのです。母は涙が出そうでした。怒られてばかりじゃ嫌いやだよね。褒められたいよね。ちゃんと躰しっけなきやいけないという母の気負いが、怒ってばかりの毎日になっていたのだと反省しました。中二になった今でも、母に褒められると、心の底から嬉うれしそうな顔をするあなたを見るたびに、その時のことを思い出します。

大きくなりましたね。素直すなおにまっすぐ成長したあなたを見て、「○○ちゃんは、本当に良い子ですね。」と、母は毎日、心から思っていますよ。

伝わってる

中二の息子むすこが小二の時、こんなことがあった。「お前の弁当、地味じみって言われた。」と遠足から帰宅きたくした息子がポツリ。働いていた私は、子供に淋さみしい思いをさせるので、食べるものはできるだけ手作りをしようと自分のルールがあった。当時流行していたキャラ弁とは、ほど遠い昭和ただよう幕の内弁当に近いお弁当を作っていた。「そうだったの。ごめん。お母さんもキャラ弁にチャレンジしようかな。」と息子に話すと、「大丈夫だいじょうぶ。ぼくのお弁当は全部手作りで、素材にこだわって体にいいんだよ。と言いついたら、あっ、負けたと言ったんだ。」と、にっこり笑って話してくれた。言わなくても、思いが伝わっていると少しホッとした出来事でした。今は会話も少なく、私も口を開けば小言ばかり。でも伝わるように頑張がんばるね。

絵本

中三になり、息子の本棚を整理することになった。

教科書が増えてスペースを確保するためだ。

「もう読まない本は物置に移そう。」

と言い、息子に本や教科書の仕分けをさせた。

「本棚きれいになったよ。」

と、本棚を見ると、一冊だけお気に入りだった絵本が残っていた。

お気に入りすぎてテープで何度も修理している本だ。

「これは置いておくの？」と聞くと、

「これは置いておくでしょ！」と言ってくれた。

母と同じ気持ちでいてくれてありがとう。

また、読んであげたい。



伝えておきたいこと

「一緒に遊んでくれるお兄ちゃんが欲しかった…。」まだ小さかったあなたがポツリと呟いた一言。五歳年上の兄が二人いるけれど、一人はお空で、もう一人はハンデを抱えていて。兄弟同士遊ぶいとこたちを見て、羨ましく思つての言葉だったのでしよう。私自身、全介助の兄を育てるのに必死で、少し寂しい思いをさせていたのかもしれない。成長の遅い兄をぐんぐん追い抜いて、いつの間にか弟のあなたのほうがお兄ちゃんみたいになったね。小学校低学年の頃、「ぼくの弟の〇〇ちゃんです。」とみんなに紹介して笑い合つた。その言葉どおり、今ではあなたが兄の面倒をみてくれるように…。

兄弟で笑い合つて楽しそうにしている姿を見ると、私にとって一番幸せを感じる瞬間です。ハンデを抱える兄を育てるのが大変だったあの頃。次の子を産むか悩んだけど、出会えたのがあなたでよかった！いつもあなたのやさしさに支えられています。いつまでこうして一緒に暮らせるのかな…と、ふと考えてしまうことがあります。兄や私たちのことを心配に思うときがくるかもしれないけれど、あなたはあなたの未来を自由に羽ばたいてね！優しいあなたにたくさん幸せが訪れますように…。

「上を向いて歩く君へ」

小二の頃から始めたラグビー。怪我はつきものと心の準備はしていた……

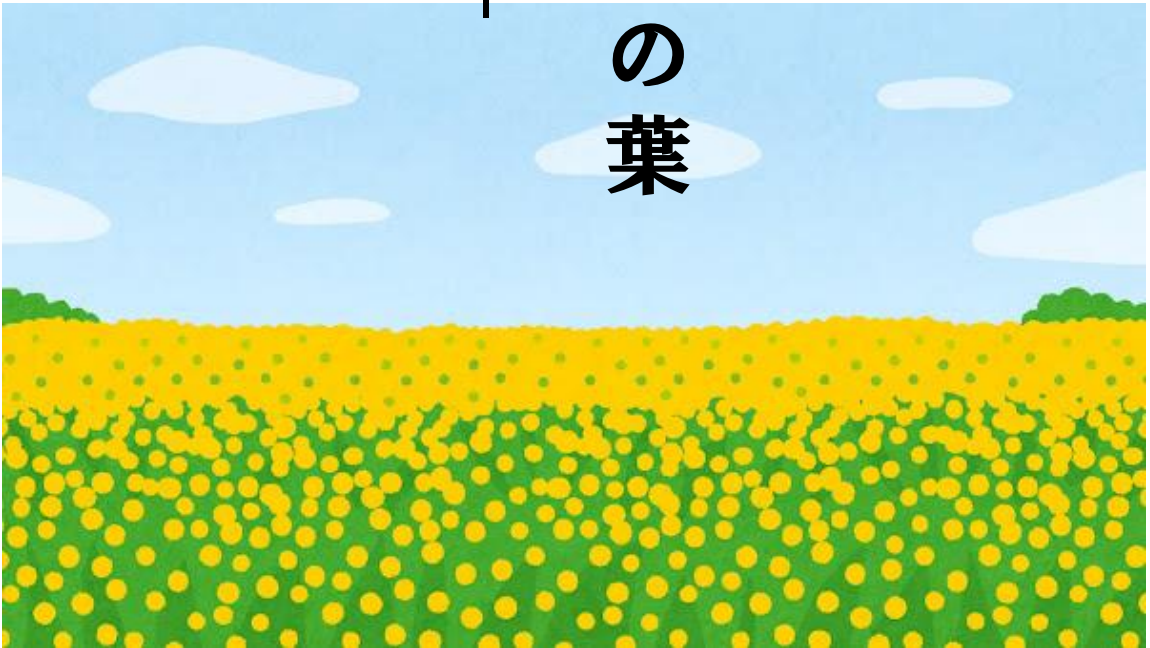
つもりだった。練習中に受けた電話は、いつもより深刻で緊張が走る。

検査の結果、一番の治療は手術なのだが、成長期のため今はリハビリしながらの温存治療が望ましいと、主治医からの説明を二人で受けた。「手術」と聞いて、手が冷たく汗ばむ。目標としていたことが、遠い夢のようではうつつとした。「お母さん泣きそう。」「それ、俺の台詞。」「手術したら、一年は難しいって。」「まだ、手術と決まったわけじゃない。怪我をしない体を作って練習する。俺、上手くなるかも。」「心がふわりと軽くなる。横を見ると涙をこらえて上を向く君。スタスタと前を歩く君の背中が、とても頼もしく見えたんだ。支えているつもりが、いつの間にか支えられていたんだ。」



「**思いを交える**」**言の葉**

—**子から親へ**—



あの頃の

僕は昔、七夕でこんな願いを書いた。「お母さんが幸せになりますように。」と。その時の自分のことは覚えていないが、お母さんの反応は今でも覚えている。泣きながら、「ありがとう。」と僕に言った。すごくうれしかった。こんな僕が、お母さんを幸せにさせるなんて、と。お母さんが泣いていて、僕まで涙がでた。あのときのお母さんの優しいぬくもりをいつになっても忘れたくない。おそくまで、頑張っているお母さん、どんなときでも、僕をほめてくれたお母さん、お父さん。そんな僕の家族が大好きだ。たまに腹が立って、文句を言うかもしれないけど、これから、僕のそばにいてください。「すてきな息子になれるように、頑張るね！お母さん、お父さん。」

单身赴任の父ちゃんへ

電話の声を聞いたときはびっくりした。コロナで他の人とほとんど話してないからすごく低い声になっていたのだ。あんなに元気だったのに。さびしいと思う。今まで四人でワイワイ毎日話していたのが、急に一人になりシンとなってしまうんだから。

今はコロナだけど、たまにはこっちに帰ってきてほしい。そして、いつも明るい四人の家族になって、またいつもの明るい話をしていたい。だから、ワクワクをうったから、またこっちに帰って来てね。父ちゃん。



電話越しの父の声

大きな背中せなかで何でもできる。そんな父が大好きだ。それなのに、私が中学校にあげると同時に父は単身赴任ふにんになった。それから、父とは毎日のように電話をしている。この前はバスケでキャプテンになったと伝えると、とても喜んで聞いてくれた。でも、電話をしていると、とてつもなく会いたくなる。電話越しの父の声は、疲つかれているのだ。家族のために頑張がんばっている父の姿が想像できる。長崎に行つてまで、一人になつてまで仕事をしていると考えると、私も頑張れる。昔から、ごっこ遊びにまでつき合つてくれた。家族のために楽しいことを考えてくれる。ずっとずっと思い出を大切にしてくれて、昨日のここのように楽しく話してくれる。そんな父が大好きだ。お父さん、いつもありがとう。今日は電話で何を話そうかな。

誕生日

私は、毎年誕生日が楽しみだ。でも、他のお家の誕生日とは少し違ちがっている。それは、誕生日プレゼントがないことだ。十歳さいを過ぎるともらえなくなるのが私の家の決まりだ。兄の時もそうだった。最初の頃は、そんな家の決まりが嫌いやでしかたなかった。でも父と母は毎年、私の誕生日の日は必ず仕事を休んで部屋かまどの飾りつけをして家に帰つてくる私を迎むかえてくれる。誕生日プレゼントをもらっていた頃も嬉うれしかったが、こうして時間をかけて準備をして喜ばせてくれる誕生日も素敵すてきだなと思った。父と母の誕生日の日には、私が部屋をめぐらせば飾りつけをして喜ばせてあげたい。そして、何よりも面と向かつて「お誕生日、おめでとう」と言おう。

母の声

僕の母は声が大きいい。僕は母の声が大き
いことが苦手だった。よくドラマを観てい
るときに怖いシーンや驚くようなシーン
で母は大声で悲鳴をあげる。その声が大
きくて僕もびっくりするし集中できない。ま
た、僕や弟に怒るときも大声で怒鳴る。僕
は今までもう少し小さな声でしゃべって
ほしいと思っていた。

でも、僕が試合のときのビデオを見てい
るときに気づいた。僕がライバルを抜いた
瞬間大声で喜ぶ母の声に。僕はその声を聞
いたとき、とてもうれしかった。そしてこ
れからもこの声で応援してほしいと思っ
た。



父の魔法の言葉

私の父は、夜寝る前に「おやすみ」は言
いません。そのかわりに、「お父さんはず
っとあんたの味方だよ。あんたが息さえし
てくれればいい。」と、毎晩言ってくれま
す。中学生になり、私はそれを言われるの
が恥ずかしくなっていました。

そんなある日、私は学校でいやな事があ
り、明日がくるのが不安で、ベッドの中で
泣きじやくっていました。すると父が帰っ
て来た音がしました。父は泣いている私を
見て、いつもより優しくあの言葉を言って
くれました。いつもなら何も感じないはず
だったのに……。私は魔法にかかったよう
に心がポカポカしました。

こうして父の何気ない一言に、私は救わ
れてきました。今はまだ照れくさいけど、
いつか面と向かって、「ありがとう。」を
伝えたいです。

反抗期はんこうき

「あんたには反抗期なんてないのかね。」
自分で「一生反抗期」と言っている母に、
僕は最近笑われる。

マイペースでダジャレ好き、怒おこられていても笑う僕に母はいつも怒る、それでもへこたれずにダジャレを言うから、また怒られるのだ。第二人が反抗的なので僕が怒らないのが目立つ。

だけどこの前、僕が母に言い返してけんかになった。ひさしぶりのけんかでも、次の日にはまた笑い合った。その時僕は、
「僕にも反抗期がきたかな。」

と、母に聞くと、
「あんたなんかまだまだよ。」
と言われた。

反抗期への道は遠いみたいだ。

秘密のラインひみつ

スマホを買ってもらって、すぐいろんな人とラインを交換こうかんした。グループラインも作った。

ある日のお昼。通知がたくさんきて音がうるさかった。母は、興味津々きょうみしんしんで、

「何のことでやりとりしてるの？」

と聞いてきた。私は、あわてて、

「言えない。」と返した。

— もうすぐ母の誕生日たんじょうびなのだ。—

兄弟でケーキはどうするか、プレゼントは何にするかなどのやりとりをしていた。

バレたくない。バレたらダメ。

そう思いながら、通知音が鳴るスマホを手に取り、秘密のラインを始めた。

共鳴きやうめいよりももっと

私が嬉しい時、ママは私と同じくらい喜んでくれる。私が悲しい時、ママは一緒に悲しみ、励ましてくれる。まるで、理科で習った「共鳴」みたいだな、と思っていた。でも、それは勘違いだった。私が微笑んでいる時、ママは満面の笑みで私を見ている。私が何かに傷つけられた時、ママは私以上に傷ついて、怒っている。私とママが「共鳴」しているのではなく、ママは私の感情を私以上に感じて、大きくしてくれる。私は最近このことに気付いた。

ママへ。いつも私以上に喜んでくれて、泣いてくれて、怒ってくれてありがとう。私の心を軽く、大きくしてくれてありがとう。いつか私もママの心を軽く、明るくできるように、まずは「共鳴」から始めてみるね。

父の涙なみだ

父の日に母と妹と私で日頃の感謝を込めた手紙を本のようにしてプレゼントした。父は、プレゼントがあると聞いたとき、「なんだろう。洋服？ハンカチ？」と、わくわくしている様子だった。そして、笑顔で中身を取り出して、「本？」とつぶやきながら開いた。そしてページをめくるたびに、父の顔はくしゃつとなり、声を上げて泣きはじめた。いつも優しくおもしろい父だから最初はふざけているのかと思ったが、大粒の涙をぬぐっているのを見て驚いたし、父からの想いが伝わりとても嬉しくなった。

今、その日の話をするときと照れくさそうに笑ったり、「泣いてない。」とか、「覚えてない。」と言ったりするが、父の机にはいつもあの本があって、ときどき開いて笑顔になっているのを見る。

私の日常

弟が小学校から帰ってくる。

忘れ物に気付く。

母が怒る。

弟が逆ギレする。

そんな二人を見ながら私と父は、

「親が親なら、子どもだな。」

と、あらためて実感する。

でも、そんな「私の日常」が、一番幸せ

なんだ。



大丈夫

「忘れ物してない？」

これ、毎朝の母の口ぐせ。

「ああ、うるさいなあ」

これ、私の心の声。

小学生の時、朝と夜いつも一緒に時間割を確かめながら、母が言っていたことを急に思い出した。

忘れ物をしたら困るのは自分、一生懸命教えてくださる先生にも失礼だよね、だから忘れ物したらだめ。

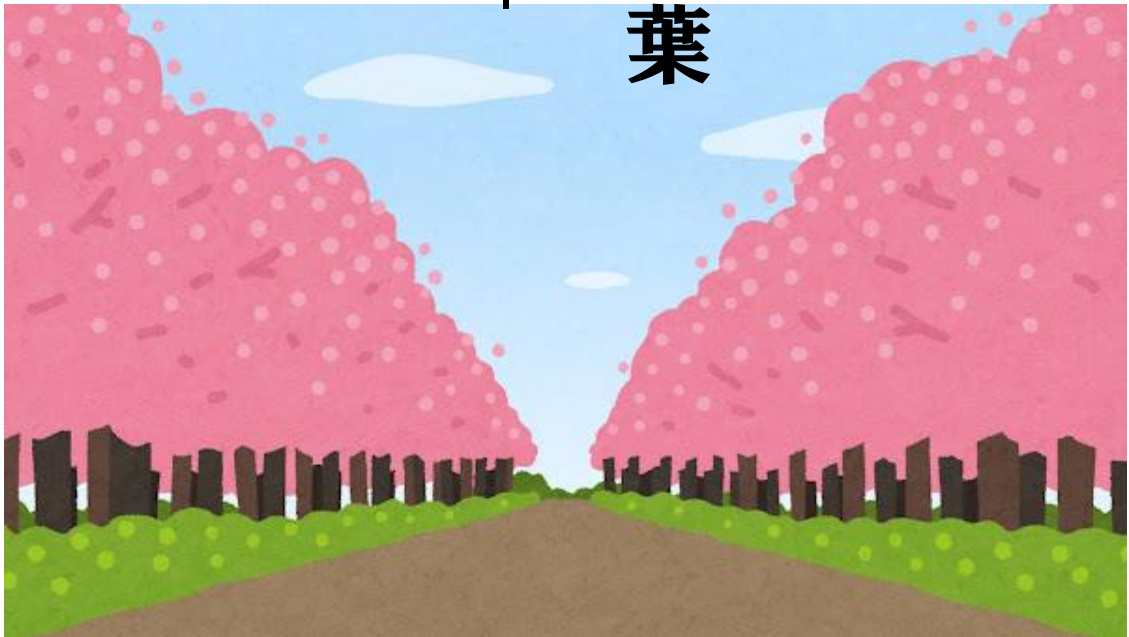
そうだ、だから私はいつも二度確かめる、自然にその習慣が身についていたんだ。

直接言えないから今、言います。

「大丈夫だよ、お母さん。今日も二度確かめたよ。」

「思いを重ねる」言の葉

— 親から子へ —



こころの言の葉

「たった一言でいいよ、書いてね。」
提出直前に渡されたこの用紙。

（何もかも直前で、小さい頃から変わってないなあ。）と同時に浮かんだ言葉は、幼い時から持ち合わせている優しさ。

小さい時から構ってあげられず、忙しさを理由に自分のことや仕事ばかりで何一つ思い出も作ってあげられてない、と思う今日この頃。

こんな私にいつも「おかえり。」「お疲れさま。」「気をつけてね。」「行ってらっしゃい。」「ありがとう。」「ごめんなさい。」「時には、「可愛いね。」って褒めてもくれる。

いくつになっても優しい我が子。本当に尊敬する。

これからも、ずっとあなたの背中を見て、私は育ちます。

友達

お父さんの仕事の都合で、今まで沢山引越しをしてきましたね。そのたびに住む場所や学校が変わって、せっかく仲良くなつた友達と、さよならしないとイケなくて寂しい気持ちもあつたと思います。

でも、引越した先でも気の合う友達ができ、今では沢山友達ができましたね。そんな友達と年賀状で近況報告したり、電話で話をしたり、今でもつながっていられることは、素敵なことだと思います。

引越しがあつたから出会えた友達、これから先も転校があると思うけど、出会った友達を大切に
していつてくださいね。



宝物のメッセージカード

「はい、お母さん。」

と照れながら、毎年、誕生日と母の日には手作りのメッセージカードをプレゼントしてくれるあなた。

中学生になっても、もらえるなんてうれしくて仕方ありません。

飛び出すカードや切り絵カード、時間をかけて作っているのがよく分かります。

あなたが考えている事、思いが伝わる素敵なカード。

小学校に入学した時、ランドセルが重くて転んだ姿を思い出し、毎年増えていくこのカードで成長を感じます。

生まれてきてくれてありがとう。

作戦会議

ふと目を覚ますと、台所で子供達がお皿を洗う準備をしている。

お兄ちゃんが妹に、

「お母さんを起こさないように静かにお皿を洗うから、お皿を拭いてね。」と指示を出している。

どうやら、私は夕ごはんを食べた後、テレビを見てそのままうたた寝をしてしまっていたようだ。

二人で並んだ後ろ姿を見て、何だか頼もしく、愛らしく思ったので、このまま寝たふりをしていようと思いました。

そんなかわいい二人ですが、今では身長も私を追い抜き、とても大きくなりました。

小さい頃から仲の良い二人ですが、これからは変わらず仲良く、助け合って欲しいなと心から願っています。

「ぼく　じーとしてた」

幼稚園の入園式。どうしても、手を振ったり、おしゃべりしたりしそうなあなたが心配だった私。朝からずっと、「じいっとしておくんだよ、じいっとね。」の言葉を繰り返して出発。

親の心配をよそに、意外と落ち着いて式を終え、ほっとして帰宅しました。「なあんだ、成長してきてる証拠かな。」と主人と話していると…、覚えたばかりの平仮名で何か書いている姿がありました。たまたまれた紙には、「おかあさんへ　きょうからにゆうえんしきだね　ぼく　がんばった　ぼく　じーとしてた」の文字が！つたない文章の中に、あなたの頑張りを感じられ、あまりの愛おしさに家中が笑顔に包まれました。約束を守ろうとするまっすぐさ、今も健在です。思い出が増える日々に感謝していますよ。これからもよろしくね。

実は……

「ほかのお母さんはこの曲とか聴かないんだって。」娘から言われた。「え、ジャニーズとか聴かないのか。」と思った。

娘と一緒にDVDのライブを観て、まるで会場にいるかのようにしゃいでいる。確かにほかのお母さん達と少し話が合わないこともあるから、精神年齢が低いのかも…。

でもね、娘よ、毎日ジャニーズを観ているのは母だけではないのだよ。父の鼻歌はジャニーズだったよ。



証^{あかし}

ひいおばあちゃんの家にある柱のしるし。
あなたが一歳^{さい}から続く、一年に一回の成長の記録。

この前、すこし背^せ伸びをしてしるしを見たよ。

うれしいような、さみしいような。

柱のしるしは成長の証。

あなたを見守^{まも}ってるみんなの愛情の証。



心を読む能力

母は息子^{むすこ}の心を読む力を持っています。
なぜか顔を見たり声を聞いたりすると分かります。

楽しいこと、うれしいことがあったとき、辛いこと、嫌^{いや}なこと、良いことも悪いことも能力を使って読み取ろうとします。

そんな母も能力を發揮^{はっか}できない日もあります。

仕事で疲^{つか}れた時や体調が良くない日です。

そんな日は息子が能力を發揮します。

この能力は、思い合っていると持てる能力かもしれません。

であれば、失いたくない能力だと思えます。

変身ベルト

君が三歳さいだった夏の日、散歩に行った帰りにコンビニに寄りましたね。あの時、君は、おもちやの変身ベルトの前で真剣しんけんに悩なやんでいましたね。「買おうか。」と声を掛けると、「変身して元に戻もとれなくなったらどうしよう：。」と言いましたね。あの時、父は、どうして変身できないのか、現在の技術みじゅくの未熟みじゅくを恨うらみ、変身させてあげられないことを悲しく思ったものでした。それから君は、もう十四歳になります。父は君に目標や夢をもって欲しくて、「水泳部に入ってみたら。」「プロ野球を目指しては。」「テストで百点目指したら。」などと声を掛けてみますが、君はいつも「僕には無理。」とあきらめてしまいますね。君が今、何かを始めれば、将来しやうらい変身できるのに。何か目標を見つけて、君が努力する姿すがたを楽しみにしています。変身できるよ！

口ずさむ

中学一年の長男が夕食後のゆっくりした時間に、二十年前流行はやった歌を口ずさんでいた。

いつも私の車に乗るときに流れている曲だ。少し驚きもあったが、なんだか嬉うれしい気持ちも芽生えていた。

今度、長男が興味ある曲も聞いてみようと思う夜だった。



兄妹ゲンカ

久しぶりに兄妹ゲンカを見ました。それも目の前で。内容は、些細な物の貸し借りです。高校一年生の息子と中学三年生の娘。この歳になると言葉巧みにお互いの揚げ足を取ったり、時効であろうという物事を持ち出したりと、二人のやり取りに成長さえ感じました。「お互いの事を良く見たり、聞いたり、感じたりしているんだな」と思いました。

小さい頃は、取っ組み合いをして、妹が泣いて終わるだけでした。歳が一つしか違わない二人は、双子のように同じ時間を過ごしてきました。そんなことを思い出していると、久しぶりの大きな兄妹ゲンカは収まり、自分の思いをすべてぶちまけた二人はすっきりしたようで、仲直りに至りました。これからも何でも言い合える兄妹でいてほしいです。

将来の夢

幼稚園のとき、「将来の夢は看護師さん」と言った時、お母さんはとてもうれしかったです。

なぜなら、私も看護師。中学二年生になった今も、変わらず看護師を目指しているあなたを誇りに思います。いつかあなたと一緒に働ける事をお母さんの将来の夢とします。

頑張っ
てね。



令和3年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 16,871点(中学生14,608点 親2,263点)

賞	中学生の部	賞	保護者の部
大賞	森 未来 瑠	大賞	近 藤 弥 生
準大賞	増 田 姫 奈	準大賞	橋 元 昌 代
準大賞	秋 廣 桃 伽	準大賞	本 田 あゆみ
優秀賞	東 條 心 愛	優秀賞	大 迫 恵里子
優秀賞	小 園 心 優	優秀賞	原 田 真 琴
優秀賞	古 川 綾 乃	優秀賞	松 隈 基 子
優秀賞	貴 嶋 由 衣	優秀賞	迫 田 里 佳
優秀賞	溝 内 春 日	優秀賞	桑 原 総 代
優秀賞	立 石 真 子	優秀賞	下 田 紀 子
優秀賞	中 尾 琵 奈 里	優秀賞	田 畑 裕 子
入選	富ヶ原 陽 樹	入選	山 下 真 司
入選	須 賀 結 麻	入選	子 島 由 紀
入選	永 田 羚 真	入選	黒 木 絵 里 香
入選	梶 原 IマIツウ	入選	林 美 保
入選	前 山 和	入選	野 本 さやか
入選	内 山 湧 太	入選	重 野 由 夏
入選	杉 本 楓 悟	入選	宮 元 美 由 樹
入選	宮 前 陽 奈	入選	川 原 千 恵
入選	山 下 凜 花	入選	和 田 くるみ
入選	佐々木 和 夏	入選	水 流 聡 子
入選	福 岡 華 野	入選	山 本 真 生 子
入選	速 見 麻 衣 子	入選	栗之丸 隆 志

団体特別賞 緑丘中学校

令和3年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～令和3年11月27日（土） 鹿児島市教育総合センター 3F体育室～



審査委員講評

審査委員長 原田 義則 先生

今年には新型コロナウイルス感染症の影響から、出品数の減少が心配されていきました。しかし、ふたを開けますと、中学生から約一万四千六百点、保護者から約二千三百点、合計約一万六千点を超える作品が寄せられました。これは、昨年度を約千五百点も超える応募数です。また、参加学校の生徒数の約八十五%に達したと聞いております。改めて「こころの言の葉」コンクールが、皆様から大切にされていることを感じました。審査員を代表いたしまして、御応募してくださった皆様に深く感謝申し上げます。

今年の作品も力作ぞろいでした。特に今年の作品の特徴として、書き込まれた文字数が多かった点が挙げられます。言葉と言葉を丁寧に紡ぎ、日常の生活風景と親子の気持ちが見事に表現されていました。そのため、作品に込められた「思いやる」という気持ち、例年以上によく伝わってきました。

ぜひ、皆様にもこの作品集を御覧いただき、「言の葉の力」を感じてほしいと思います。「言葉の力」がマイナスに働くと、悲しい事件につながります。しかし、プラスに働けば、「幸せ」を身近な人へ、遠くの人へ世界の人へと届けることができます。もし、言葉が足りない場合は、親子のように、お互いが書き足していけばいいのです。

多分、コロナ後の世界を作り直すには、距離が遠く離れていても、絆を結び直す「言葉の力」が必要となるでしょう。その意味においても、本コンクールがこれからも続くことを願ってやみません。

最後になりましたが、鹿児島市内の中学校関係者並びに鹿児島市教育委員会の皆様に、厚く御礼を申し上げます、結びといたします。

鹿児島大学教育学部 国語教育講座 准教授

西 ゆう子 先生

コロナ禍、感染拡大防止のため様々な制約の中で、周りとの会話もままならない日常です。こんな時だからこそ、親と子が日ごろ面と向かつては言えない思いを手紙で交流されたことは、お互いを見つめ直す貴重な機会となったのではないのでしょうか。

心に残ったことは、まず、子供たちが親の後ろ姿をよく見ているということです。例を挙げますと、「父の背中」では、子供は父の日々の努力を見ていて、前へ進む格好いい父の背中を追いかけると言っています。「ともにも成長できることが嬉しい。」という大人へのメッセージも受け取れました。

次に、家庭では「我が家」流のやり方で、その時々愛を伝えていくということです。例を挙げますと、「ゼッケンつけ」では、「中三のゼッケン、いつもより細かい針目で仕上がっていることに気づいた？」と、母の一针に込めた愛を伝えていきます。また、「伝わってる」では、「母の弁当は地味でなく、全部手作りとお慢しだ」という息子との思い出が綴られています。見た目ではない「愛」を受け止める子供の成長の喜びを伝えていきます。同時に「大人は子供から学んでいるんだよ。」というメッセージも受け取り、大いに共感しました。

この「こころの言の葉」には手紙を綴る過程で、新たなコミュニケーションへ繋げるきっかけにしたいという目的があり、各家庭でこの目的が達成されたのではないのでしょうか。

子育てや生き方の参考にもなると思います。ぜひ、「こころの言の葉」集を御活用ください。

元市教育委員会スクールカウンセラー

遠藤 陽子 先生

家族間で感謝の思いを手紙にしたためる機会は一生のうち何度もあるものではありません。代表的なのは結婚式の花嫁の手紙でしょうか。私自身、結婚式で親に感謝の手紙を送り、親からも手紙をもらいました。ただ、思いのやり取りをしたのはその一度きりです。結婚という節目があったからこそ普段言えない思いをやり取りすることができました。普段は、気恥ずかしくてなかなかできません。こころの言の葉は、そんな気恥ずかしさと向き合いながら、日常の中で感じる「ありがとう」を伝えられる場となれば幸いです。今回御参加くださった約一万六千点にも及ぶ作品の一つ一つに、家庭ごとの何気ない「ありがとう」があふれていました。

昨年は新型コロナウイルスの影響により、今までの当たり前がどれほど尊いものだったかを訴える内容が多かったように思います。今年は新しい生活スタイルの中で見つけた家族の繋がりと相手を気遣う言葉が多く見受けられました。そして、家庭ごとの愛情表現も様々で、「こんなに素直に親子のやり取りができる家庭に育った子供たちはどんな大人になるのだろう」と胸が弾む思いがしました。デジタル化が進む世の中で、手書きの文字で気持ちを贈るといふ原始的なやり取りは、時代が進もうとも一番思いが伝わる伝達方法です。当たり前が当たり前ではないからこそ、大切な人へ大切な思いを届けてみてはいかがでしょう。この「こころの言の葉」が思いを伝えるきっかけになればと思います。

フリーアナウンサー

隈元 浩二郎 先生

コロナ禍のせいもあるのでしょうか。今回は家族の有り様が大きく変化しつつあるのかと感じさせる作品が、いくつも見受けられました。

思春期を迎えた中学生という年頃は、素直に保護者の気持ちを受け取ったり、自分の気持ちを包み隠さず伝えたりすることは難しいものです。でも、今回の作品の中には相手のことをよく観察して、自分なりにどうすればよいのか、自分はどうあるべきなのかを模索している作品が目立ちました。また、コロナ禍の件とも重なり、長時間共に過ごす家族もある一方で、長期間家族が離れ離れになっている様子も伺える作品がいくつもありました。長期間会えなくても、相手のことを一途に思い、気遣いする言葉を重ねる健気さに心を打たれました。

人は、いや家族は逆境に立たされると、それまで見えなかった相手の様子や思いが見えてくるものなのでしょうか。家族の一人一人はそれぞれの立場や役割分担の中で日々に追われ、もがき、苦しんでいます。家族の誰もが何かしらの苦労や悩みを抱えて生きているのです。にもかかわらず、常に家族のメンバーは互いのことを気にかけて、見守ってくれているのです。いつも一番に気遣い、心配してくれているのも家族なのです。

今回も、そんな家族の心遣いが満載です。親身になって家族のことを思っているからこそ、その情景がまるで映画でも見ているかのように脳裏に浮かびます。ぜひご家族一緒になってお読みいただき、家族の有り様を見つめ直す機会にして頂ければ幸いです。

元中学校校長

南 香織 先生

はじめに、「こころの言の葉」コンクール審査にあたり、ご応募いただきました全ての方に感謝申し上げます。一つ一つの作品に「それぞれの思い」が詰まっておりました。今、世界中で流行している新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活に大きな影響を及ぼしています。今まであたりまえだったことが、あたりまえではなくなり、そんな日常の中で生まれるメッセージにあらためて、一瞬一瞬がかけがえのない時なのだということを改めて感じました。

今回の作品は、コロナ禍の中、自粛等が続き、一緒に過ごす時間を共有していたことが多かった中で、日常生活の家族への思いがびっしりと詰まっていたように感じました。また、メッセージの中に『愛情表現』がたくさん使われている作品が多くありました。

子どもたちの思いの中にも、親を気遣う思いやりの姿がたくさん見られました。子どもも日々の生活の中の限られた時間の中で、「確かな絆」を育んでいると思える作品の数々に出合うことができました。

「こころの言の葉」作品集をご覧になれる子育て世代の皆さまにとって『子育てに、悩みはつきもの、悩みをかかえているのは、自分だけじゃない！』そんなふうには、安堵し、ふっと肩の力をぬき、ご自身の子育ての参考や活力になれば、また、子どもさんと語る機会になればと思っております。

「今しかできない子育て」を共に学び、悩みながら、同世代の子どもをもつ親として、一緒に楽しみましょう！

市PTA連合会会長



編集後記

関係の皆様の御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十九集が完成しました。

一万六千点を超える応募数は、各中学校での取組の成果であると感謝申し上げます。親の部の応募数も二千点を超えました。これは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」を果たす意味でも、大きな成果であります。

今年は東京オリンピック・パラリンピックの開催により、大きな感動を味わうことができませんでした。昨年度から人との接触を控え、孤独を感じてしまいやすくなっていました。改めて、他者を尊重して生きていくことの素晴らしさを感じることができました。

私たちにとって最も身近な他者は家族です。しかし、子供はもちろん、母親も、父親も、お互いへの思いを伝えることは、やはり難しいものです。いつもうまく表現できない思いを、言の葉に込めて応募してくださった大勢の皆様、心から感謝いたします。

本年度の団体特別賞は、緑丘中学校が受賞しました。積極的な応募を評価されての受賞です。それぞれの学校での取組が、このコンクールを支えてくださっています。

これからも、様々な場面で、ますます親子の心の交流が図られることを願っています。



こころの言の葉

～第19集 あなたと過ごせる この瞬間を大切にしたい～

令和4年1月

発行 鹿児島市教育委員会

〒892-0816 鹿児島市山下町6-1

TEL (099) 227-1941 FAX (099) 227-3016